教育総合センター
だより

ＮＯ．１６３
令和　４．３．１

『子どもの健康と体力を考える』
～楽しさを知り、意欲が育ち、習慣化する～

尼崎市教育委員会事務局
参与　　北垣　裕之

「体力」は、あらゆる活動の源です。人間の健全な発達・成長を支え、自ら学び考えるといった「生きる力」 の重要な要素となるものです。子どもの時期に活発な身体活動を行う事は発達・成長に必要な体力を高め、運動・スポーツに親しむ身体的能力の基礎を養い、病気から身体を守る抵抗力となり、心身の健康な状態を維持する事に繋がります。

令和３年４月、市教委と小中学校の体育担当教諭との会議を経て「あまっ子体力向上プラン」が策定されました。

体力を考えていく上では、発達段階の特性に即した取組が必要です。小学校低学年の時期（プレゴールデンエイジ）は、遊びながら様々な運動を経験し脳や身体に多くの刺激を与え動作に対する神経回路を作っておく事で、その後の運動能力を大きく伸ばす事ができるようになります。

小学校中学年～高学年の時期（ゴールデンエイジ）は、動きの習得に対する準備が整いながらも、脳神経系がまだ柔軟であるという非常に特異な時期です。運動するに相応しい身体へと成長するだけでなく、身体を自由自在に動かす事ができ、新しい運動や動作を素早く習得しながら様々な状況下で上手く対応する能力が向上していきます。

中学校以降（ポスト・ゴールデンエイジ）は、主に呼吸・循環器系の発育が盛んになります。持久走など有酸素運動を十分に行い「持久力をつけること」を目標にすると有効です。

また、身長や体重など骨格の成長が著しい時期に入るので骨格の急激な変化によって感覚にずれが生じ、思うように体が動かせず今までできていたスキルを上手に発揮できないといった事も起こりやすい時期です。しかし、諦めず反復練習を行う事で感覚は修正されます。一方で発達した筋力などの影響により、より強く素早い動作が可能になってくる時期でもあります。

運動やスポーツは体力向上や責任感、連帯感の涵養、互いに協力し合う事により友情が育まれるといった好ましい人間関係の形成に資するものでもあります。そして自己の成長を努力の成果と結び付けて実感できる貴重な体験でもあります。これらは将来を生きる自信（自己肯定感）と困難に打ち勝つ力（チャレンジ精神）も育みます。

学校現場では、プランに基づき市教委の支援を活用しながら各校の実情に合わせた独自の体力向上計画を立て取り組んでもらっているところです。取組のひとつとして新体力テストと運動意識調査アンケートを毎年全校で実施します。テスト結果から指導者は自校の子どもの能力を確認、把握して指導に役立てる事ができ、子ども達は自身で目標設定を行えるように活用していきます。アンケートは、子どもの運動に対する意識、運動する機会の多寡、運動習慣の変化と運動有能感の確認を行い、次年度の自校の体力向上計画や組織作りに役立てる事ができます。

これからも子ども達が運動の楽しさを知り、運動への意欲が育ち、運動が習慣化する事で健康で充実した生活が送れるように支援していきたいと思います。

☆☆☆尼崎市立学校給食センターについて☆☆☆

1月24日から1月30日までは、「学校給食週間」でした。本市でも「給食展」が開かれましたが、今年の尼崎市の給食にとっての大きな出来事は中学校給食の開始です。そこで中学校給食を提供する「尼崎市立学校給食センター」を紹介します。

1　経過

全国的に中学校給食の実施が進んでいることや、本市でも中学校給食の実施を望む保護者の声等を受け、平成30年1月に策定した「尼崎市中学校給食基本計画」に基づき、令和元年度からＰＦＩ事業で、学校給食センターの整備に取り組んできました。

この度、「尼崎市立学校給食センター」が完成し、令和4年1月12日から中学校に給食を提供しています。

2　学校給食センターの特徴

⑴　HACCPの概念に基づく高度な衛生管理

HACCPの概念に基づき、「汚染作業区域」・「非汚染作業区域」等に区分し、調理するなど、衛生管理を徹底します。

⑵　最新設備を活用した豊富な献立の提供

最新の調理設備等を導入し、温かいご飯、おかずなどに加え、微酸性電解水を使用し、果物なども衛生的に処理し安全に提供します。

⑶　アレルギー食の提供

通常の調理エリアとは別に、アレルギー食専用の調理室及び配膳室を設け、アレルギー物質の混入を防止します。

⑷　食育の推進

献立の充実を図るための「献立研究室」や食育講座等が実施できる「多目的室」を設け、食育を推進します。

⑸　環境への配慮

臭気を低減化させるための脱臭装置、生ごみを減容化、CO_2削減や省エネルギー機能を有する設備を導入し、環境負荷を低減します。

3　学校での給食配膳など

各クラスの給食当番が、給食配膳室に食器・食缶等を取りに行き、各教室で準備・配膳を行い、喫食します。

喫食後、食器・食缶等を配膳室に返却します。

4　献立内容等

基本の献立は、主食（週5日ご飯）、副食（おかず）3品、牛乳となります。

初日である1月12日の献立は、「祝」の文字が入ったなるとを使用した「すまし汁」や市内産のお米を使用した「ご飯」、「おひたし」には市内産の小松菜を使用するなど、中学校給食の開始にふさわしい献立としました。

1/12　Ａコースの献立

5　最後に

学校給食センターでは、成長期にある生徒の心身の健全な発達及び食生活に対する正しい理解と望ましい食習慣を養うことを目指し、学校と連携して、安全で安心なおいしい給食を提供していきます。

（学校給食センター係長　中井　誠）

☆☆☆学校運営アドバイザーより☆☆☆

今年度、従前の「授業改善アドバイザー」から、新たに「学校運営アドバイザー」として、学校運営に関する相談等にも対応することになりました。コロナ禍への対応も含めて、様々な相談がありましたが、その一部を紹介します。

【コロナ禍の対応】

・教員がコロナ感染で休みになった場合、時間割の変更も含めて臨機応変に対応するよう助言しました。その対応が長期になった時の教員の健康への留意、特に未配置教員がいる場合の詳細な対応を相談しました。

・学校行事の実施については、感染防止対策を施した実施計画を立てる必要がありますが、その際、「自身の成長を確かめたい」という子どもの願いを最大限叶えることを優先することが大切です。（例年通りに実施できるとは誰も思っていません。）中止する場合でも代替え行事の検討なども含め、保護者にもしっかり発信することが必要です。

【教員の育成や校内人事】

・校内人事では、まず次年度在籍確実な人員を配置し、同時に人材の育成を加味した３年程度を見据えた組織を想定することが望ましいと考えます。転入者は校内事情の実態を知り得ないことから、過大な期待は控えるべきです。

・明確な学校ビジョンと取組の方向性の共有化を進め、教職員の意思統一を図ることを相談しました。その際、今までとは大きく異なる状況なので、教育活動の思い切った改革のチャンスであると考えられると話しました。

・若手管理職についても、昇任間もないときは、具体的な方向性が見出せないまま、責任の重さでストレスになる場合が多いので、校長会や教頭会では不安や心配事を素直に吐露できる場であってほしいと考えます。そんな空気感は、やはり先輩管理職が醸成してほしいと思います。

【保護者対応等】

・保護者対応は、困り感を訴えたい一大決心と認識すべきです。保護者の発言の中には本意でないこともあり、丁寧な傾聴に徹し、その主訴を吟味することが必要です。その後、具体的な方向性・具体策を示しますが、大切なのは、その後の学校としての取組、当該児童・生徒の見守りです。

今年もコロナ対応に追われた 1 年になりましたが、学校は教職員一丸となって教育活動に取り組んでいます。学校運営アドバイザーとして、管理職の先生方への相談等にも対応していますが、従来の若手教員に対するアドバイスも必要に応じて行っています。

・今年は授業公開等も難しく、校内での若手教員に対する育成支援が時間的にも厳しい状況です。アドバイザーとして、自身の経験や失敗などに基づいた寄り添う形でのアドバイスを心がけました。

・若手教員には、「子どもたちから学ぶ」「何を教えるかより、どう教えるか」「認める、叱るのメリハリ」「空気を感じるアンテナ」「常に自分磨き」といった内容を、機会をとらえて伝えています。

（学校運営アドバイザー　栃下勝彦　平家祐孝）

教育情報コーナーのお知らせ

☆教育情報コーナーのご案内

教育情報コーナーでは、先生方に利用していただきたい本や資料、雑誌等を整備しています。また、必要な図書、資料等のご相談にも応じております。お気軽にお尋ね下さい。

※12/1～3/31まで、ひと咲きタワー空調工事の為、来所しての貸出・閲覧はできません。

（３Ｆ　教育情報コーナー）

【新着図書】

・『批判的読みの学習モデル』　吉川　芳則　著／明治図書
・『まんがで知るデジタルの学び』　前田　康弘　著／さくら社
・『先生たちのリフレクション』　千々布　敏弥　著／教育開発研究所
・『ネットいじめの現在』　原　清治　編著／ミネルヴァ書房
・『子どもと教師の未来を拓く総合戦略５５』村川　雅弘　著／教育開発研究所
・『生活科・総合的な学習の時間の理論と実践』
　木原　俊行・馬野　範雄　編著／あいり出版
・『うつヌケ　うつトンネルを抜けた人たち』田中　圭一　著／KADOKAWA
・『個別最適な学びと協働的な学び』　奈須　正裕　著／東洋館出版社
・『メディアリテラシー　吟味思考を育む』　坂本　旬・山脇　岳志　編著／時事通信社

（担当　松浦）

☆教育総合センターは、知の宝石箱！　　「ひと咲きタワー」は、学びのタワー！

【本の紹介】

■『二極化する学校』（公立校の「格差」に向き合う）（亜紀書房　2021年9月　初版発行）

著者　志水　宏吉：1959年兵庫県生まれ、東京大学大学院教育学研究科博士課程修了（教育学博士）東京大学教育学部助教授を経て、現在大阪大学大学院人間科学研究科教授、専攻は学校臨床学、教育社会学、『学校にできること』（角川選書）『学力を育てる』（岩波新書）等著書多数

本書は、本市の学力向上にも深く関わっていただいた、大阪大学大学院の志水教授が、「公教育は崩れ始めている」という問題意識から書かれたものである。これまでの教育格差をめぐる一人ひとりの子どもや家庭を単位とした視点ではなく、学校自体の二極化を取り上げ、その原因と考えられる「社会の私事化の進行」「新自由主義的教育政策の展開」という事象を、教育に関する諸制度の変遷や諸外国の状況を踏まえて掘り下げている。

その中には、著者の公立学校に対する思いや危機感があふれており、そこから公教育のより良い未来のために新たな道を探る提言が示されている。

■『ネットいじめの現在』　（子どもたちの磁場でなにが起きているのか）

（ミネルヴァ書房 2021年9月 初版発行）

編著者 原 清治：1960年長野県生まれ、神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了博士（学術）佛教大学教育学部教授、副学長『教育社会学』（ミネルヴァ書房）『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』（ミネルヴァ書房）など著書多数

社会問題化している「ネットいじめ」の実態を、大規模調査の報告を基に、その傾向や現代の子どもたちのリアルな人間関係から分析している。そのうえで、ネットいじめを予防するためには何が必要となるのかについて論じており、子どもに関わるものにとって貴重な示唆である。

（担当　西川）